

1.1.3 水利用の沿革

豊川における比較的規模の大きな水利用としては、永禄10年（1567年）に松原用水の井堰が完成したのを始め、明治41年（1908年）に見代^{けんだ}水力発電所が運転開始し（昭和34年廃止）、また、昭和5年には豊橋市上水が取水開始するなどがあり、古くから沿川の水道用水、農業用水、発電用水の水源として利用されてきた。一方、豊川沿川を除く東三河地域及び静岡県浜名湖西部地域では、河川水や地下水などの水資源に恵まれず、かつては絶えず干害が起こり、所によっては飲料水にも事欠いていた。

戦後、食糧増産対策として東三河地域を対象とする豊川農業水利事業が昭和24年に農林省の国営事業として着工されたが、天竜東三河地域が昭和26年に国土総合開発法に基づく特定地域に指定されたことから、豊川農業水利事業が天竜東三河特定地域総合開発計画に取り入れられることとなり、静岡県浜名湖西部地域を含めた広域的な総合開発事業として水道用水、工業用水を含む豊川用水事業に進展し、昭和43年に完成した。

この豊川用水事業では、広域的な水需要に対応するため、流域内の水資源開発に加え、一部は隣接する天竜川水系からの導水に頼っており、天竜川水系大^{おおにゅう}入川及び大千瀬^{おおちせ}川の一部を流域変更して宇連ダムへ導水するとともに、天竜川水系の佐久間ダムから宇連川に導水している。

現在、豊川から取水されている水は、農業用水として約18,600haに及ぶ耕地のかんがい用水として利用されているとともに、水道用水、工業用水として約 $8 \text{ m}^3/\text{sec}$ が利用されているなど、この地方の生活及び経済を支えている。

さらに、豊川水系は、水資源開発促進法に基づく水資源開発水系に指定されている。平成2年には水資源開発基本計画が決定され、大島ダム建設等の豊川総合用水事業や設楽ダム建設事業による水資源開発、水利用の合理化などが計画、実施されている。